江戸城・江戸関係絵図解題シリーズ 3

本記事は、科学研究費補助金・基盤（C）「近代国家模索の歴史的前提」（17K03094）および、東京大学史料編纂所画像センタープロジェクト「江戸城・江戸図・交通図および関連史料の研究」の成果の一部である。
（両代表・杉本史子）

二丸向惣絵図

［サイズ］全体法量96.20 × 95.00 cm
［形態・紙質等］一枚図、楮紙、手書彩色
［方位・縮尺記載］なし
［所蔵・伝来関係］国立歴史民俗博物館「棟梁鈴木家資料」H-1586-1-2-3

本図（図2）は、江戸城二丸御殿の表・大奥と、その周辺の門や櫓・多門などを描いた図である（二丸の位置については図1参照）。この御殿の構造は、近年、畑尚子「江戸城二丸御殿」（『東京都江戸東京博物館紀要』第五号、二〇一五年）で紹介された「元治度二丸御表大奥共総切絵図」（江戸東京博物館所蔵）と同様と認められるので、元治元年（一八六四）から同二年（慶応元年）にかけての二丸御殿の様子を示した図といえる。ただし、畑氏が紹介した絵図が、一八枚の部分図（作事のために作られた図面と思われる）で、位置関係が不明なものもあるのに対して、本図は継ぎ紙された一枚の楮紙に、御殿全体とその周辺を描いた図で、建物の構造だけではなく、塀や櫓・多門・土蔵の位置関係がはっきりわかる。江戸東京博物館所蔵の切絵図（部分図）は、古書店から購入したとのことで出所が不明であるが、本図は国立歴史民俗博物館所蔵「棟梁鈴木家資料」に含まれている。

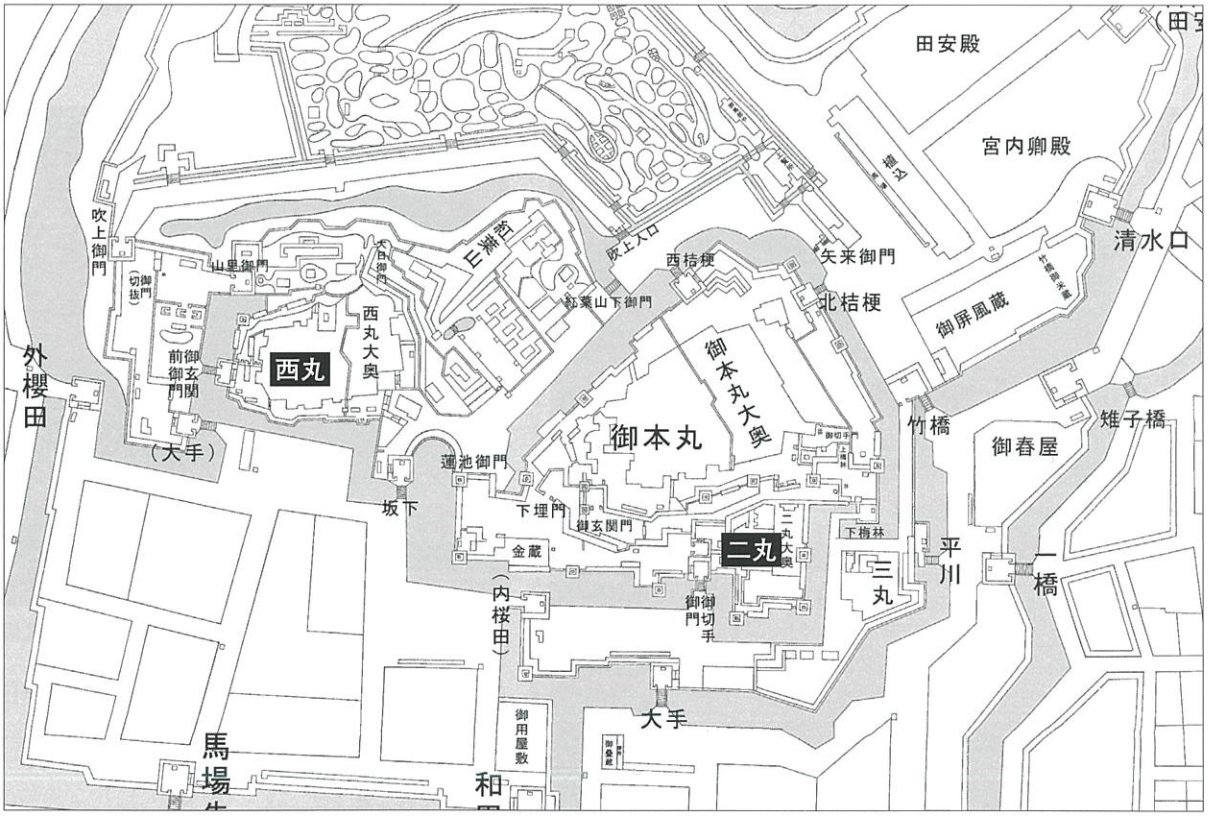

図1　本丸・二丸、西丸の位置（東京大学史料編纂所　維新史料引継本　Ｉり1528「江戸御堀内図」より　作成高橋喜子）

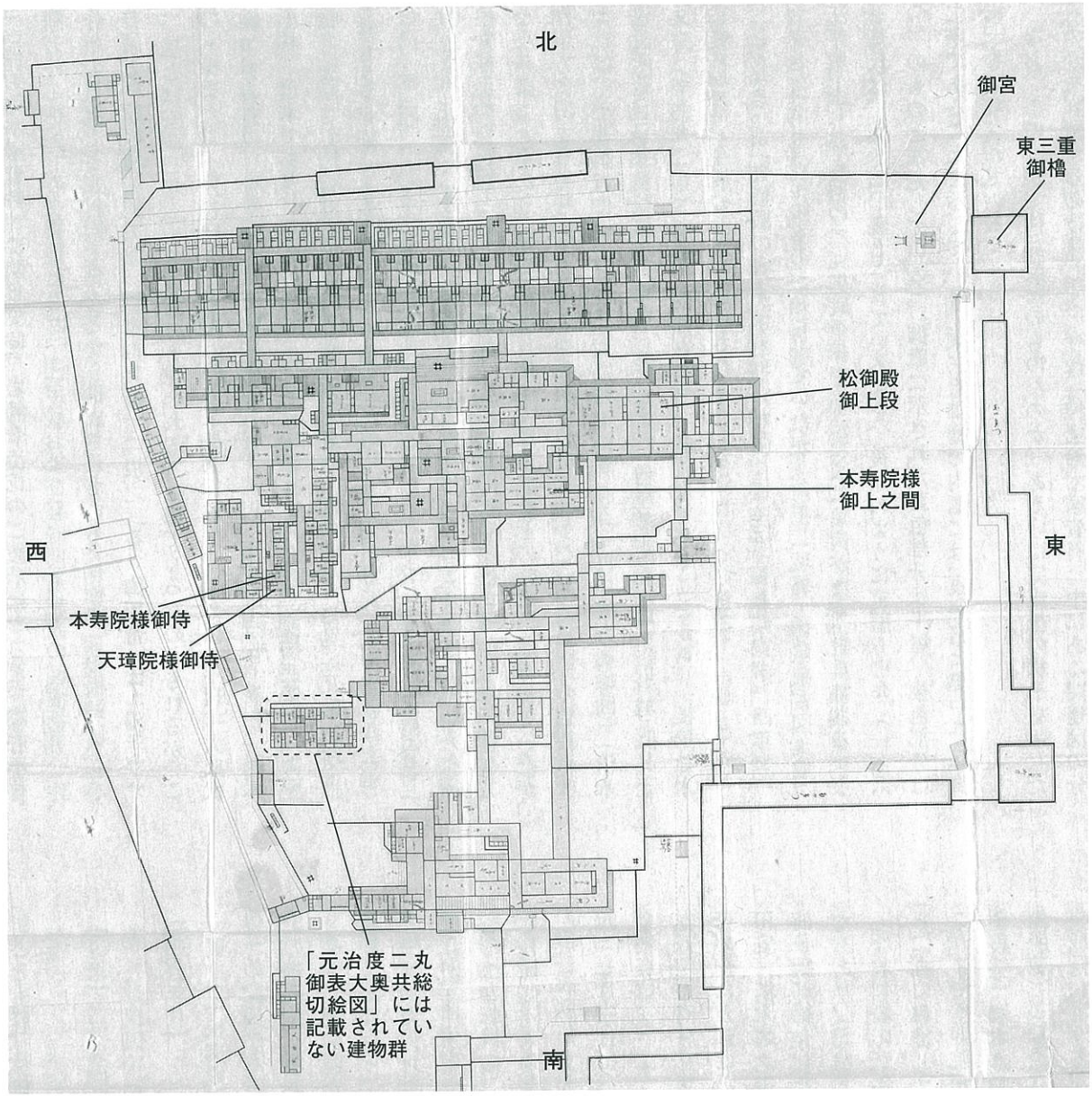
北
御宮
東三重
御櫓
松御殿
御上段
本寿院様
御上之間
西
東
本寿院様御侍
天璋院様御侍
「元治度二丸
御表大奥共総
切絵図」には
記載されてい
ない建物群
南

図2　二丸向惣絵図

「棟梁鈴木家資料」に関しては、岩淵令治氏のご教示によると、幕府小普請方の「棟梁」の文書群とされ、江戸城および幕府関連施設の図面約五〇件、作事の日記など文書類七件などから構成されている。「棟梁」の根拠は、「小普請方　屋根棟梁壁方兼　鈴木市兵衛」(「辰之弐番　御用留」H-1586-1-4-4、辰とは安政三年（一八五六）と思われる）と出てくるためとされるが、この「棟梁」は、いわゆる小普請方の大工棟梁ではない。安政五年刊「大成武鑑」によれば、小普請方大工棟梁は、大谷、依田、柏木、村松、溝口、柏木、小林、清水であり、鈴木の名はない。鈴木市兵衛の名は、前掲武鑑の「御屋根方棟梁」の欄に登場する。実際「辰之弐番　御用留」には、「瓦師　鈴木」「鈴木方　瓦師」などと出てきており、「辰之壱　御用日記」(H-1586-1-4-3)には「屋根方　鈴木市兵衛」と記されている。したがって「棟梁鈴木家資料」は、より正確には小普請方の配下で、瓦師や壁方の職人を管掌していた御屋根方棟梁の資料群といえる。なお、江戸幕府の作事組織については、作事方と小普請方とがあり、それぞれ分担して江戸城などの作事に当たっていたが、作事方に関する史料にくらべて小普請方の史料は少ない。岩淵氏の御教示によれば、小普請方については、大工棟梁に関わる「江戸城大奥絵図」（清水建設所蔵、平井聖監修・伊東龍一著『城郭・侍屋敷古図集成・江戸城Ⅰ』（至文堂、一九九二年）所収）が知られている程度であることから、「棟梁鈴木家資料」は、今後の活用が期待される貴重な資料群といえる。

これまで、二丸御殿の表・大奥を描いた図と言えば、おもに寛永一四年（一六三七）・同二〇年のものが知られていたが（前掲『城郭・侍屋敷古図集成・江戸城Ⅰ』）、幕末期の二丸御殿全体を描いた図は類例がなく、貴重である（なお畑氏は、寛永二〇年とされている図を、後述のように宝暦一〇年（一七六〇）のものと推定している）。御殿に示された黄色部分は平屋、桃色部分は二階であることを示している。東三重御櫓の内側には、東照宮と思われる「御宮」も記載されている。

なお、この図が、検討段階のものなのか、あるいは完成後の様子を示したものかを判断するのは難しく、今後「棟梁鈴木家資料」中にある関連図の分析とともに、文献史料などとの突き合わせが課題として残されている。

【表紙】「二丸向惣絵図」（手書き題簽）

【内容年代】

図中、「松御殿御上段」「本寿院様御上之間」「天璋院様御侍」「本寿院様御侍」の記載があることから、内容年代を推定できる。天璋院は一三代将軍家定の御台所、本寿院は同生母で、「松御殿」は天璋院の呼称である。

まず、天璋院が二丸御殿を住居としていた時期は、慶応元年（一八六五）四月二九日から、御殿が焼失する同三年一二月二三日までである。一方、本寿院は、文久元年（一八六一）九月二五日に本丸御殿から二丸御殿へと引き移るが、同三年一一月一五日の本丸・二丸火災によって、吹上御庭、清水御屋形へと転居し、その後二丸に御殿が竣工すると、慶応元年五月三日に二丸に移徙し、天璋院と同居することとなった。

そもそも、文久三年一一月に本丸・二丸が炎上した後の元治元年（一八六四）七月三日に、幕府は「是迄之御有形ニ不拘、格別御手軽」（『東京市史稿』皇城篇第三）に二丸御殿を再建するようにと達しているが、これは天璋院・本寿院の同居を想定して計画されたものであった（なお、元治元年一〇月五日の達によれば、二丸御殿の普請は、「西丸御普請より一段御手軽之見込を以、田安・清水等之御振合ニ相心得」とされている）。したがって、本図は、畑尚子氏が紹介した「元治度二丸御表大奥共総切絵図」と殿舎の配置が同じこともあり、元治元年七月以降の二丸御殿の図と指摘できる。

なお、慶応二年一二月一四日には、一四代将軍家茂の生母実成院が西丸から二丸に移徙してきた。畑氏によれば、二丸御殿における実成院の居所は、これまで本寿院が使っていた所とされ、これに伴い、本寿院は「二丸中奥江御移替」（「本寿院様二丸中奥江御移替ニ付可達趣」多025456、国立公文書館所蔵）となった。「中奥」とは「御休息御上之間」と考えられる。本図には、実成院に関する記載がいっさいないことから、本図は実成院が引き移る慶応

二年一二月以前の様子を示したものと考えられる。

【凡例・序・跋等】

なし

【図中の主な文字記載】

櫓・多門・門では、「東三重御櫓」「東御多門」「巽三重御櫓」「南御多門」「御多門造御土蔵」「御庭入口仕切御門」「御掃除御門」「二丸喰違御門」などの記載がある。南西側には「大腰掛」「御長屋御門」「御納戸口御門」「御風呂屋口御門」「御広敷御門」がある。表向には「御式台」「遠侍」「御上之間」「小十人番所」「火之番詰所」「御目付部屋」がみえ、その先に「御用部屋」「時計之間」「御右筆所」「御側衆」「御扣座敷」「奥向部屋」などの部屋があった。将軍の座敷・寝所と思われる「御休息御上之間」「御小座敷」や「上御小納戸」「御納戸」なども記載されている。大奥には天璋院に関わる部屋である「松御殿御上段」「御休息」「老女衆詰所」「御清之間」「御化粧之間」「御膳所」「御仲居詰所」「御末詰所」や、本寿院に関わる「本寿院様御上之間」「八畳之御間」「御膳所」「御仲居詰所」や、女中の詰所である「御広座敷」「呉服之間」「御祐筆之間」があった。西側には「御広敷御門」を入って「御式台」「御玄関」「天璋院様御侍」「本寿院様御侍」「御用人部屋」「番之頭部屋」「御下男詰所」「五菜腰掛」など、男性役人に関わる部屋も記載されている。北側には「長局御部屋」「長局六部屋」「長局七部屋」「長局拾八部屋」と長局向が広がっていた。「二丸喰違御門」を入ってすぐに、「切手番所」や「女中乗物置所」などもあった。

【その他の所見】

これまで寛永二〇年とされてきた図（畑氏は、この図に「御側御用人」の記載があることから寛永二〇年ではなく、大御所家重の住居として宝暦一〇年に新造された時の御殿図とする）と本図とでは、表の構造で本図のほうが簡略化されるなど違いがあるが、大奥の構造は概ね似ており、畑氏の指摘に従えば、元治元年再建の二丸御殿は、宝暦期の御殿をふまえて再建された可能性がある。なお、宝暦期の二丸御殿図には東側に泉水を配した御庭が記載されているが、この図にはなく、「格別御手軽」に再建されたことを裏付けている。

また本図には、畑氏が紹介した「元治度二丸御表大奥共総切絵図」には記載されていない建物群が南西側、御納戸口御門を入って左側に記載されている（「調役吟味役」「御留方書役」などの記載がある）。

【類例】

関連絵図として前掲「元治度二丸御表大奥共総切絵図」（江戸東京博物館所蔵）がある。また「棟梁鈴木家資料」には、「元治元子年二丸大奥向絵図面」（H-1586-1-2-1）がある。この図は作事用に作成された図と思われ、本図とは建物の配置や構造に複数の違いが認められる。また、部分図として、同資料群に元治・慶応期の「二丸御表御玄関遠侍向 鈴木方扣石方絵図」（H-1586-1-2-6）、「二丸大奥御広敷御玄関石方絵図」（H-1586-1-2-7）、「二丸大奥松御殿御化粧之間石方絵図」（H-1586-1-2-8）、「二丸大奥御鈴廊下中御休息御小座鋪向石方絵図」（H-1586-1-2-9）、「二丸大奥御鈴廊下御納戸向石方絵図」（H-1586-1-2-10）、「二丸大奥呉服之間御広座鋪御祐筆間番部屋共石方絵図」（H-1586-1-2-11）など、柱や礎石の配置に関する図がある。これらの図には、「真棒胴突」「蛸胴突」といった建築用語が記載されているので、作事用の図面とわかる。

【画像】

国立歴史民俗博物館のホームページ上にある「歴博画像データベース（https://www.rekihaku.ac.jp/education_research/gallery/imgdb/index.html）で、本図をはじめ棟梁鈴木家資料の画像が公開されている。

（藤田英昭）